私と愛知大学、そして沖縄

沖縄税理士会会長　百田　勝彦

百田　ご紹介に預かりました、百田でございます。当初、藤田先生から講演のお話があり、「沖縄で講演するなら、私より話がうまい人がたくさんいますよ」とお話したのですが、「どうしてもお前がいい」「では何を話せばいいですか？」「私と愛知大学、そして沖縄」というタイトルでお願いしたい、「私の履歴書を一生懸命読み上げたらいいのですか？」「何もそんな難しいことないでしょう」というやり取りの中で、まあ自分の履歴書ですか、自分の恥をさらすようで何となく恥ずかしく思ったのですが断りきれず、実は今日は大勢の前で、こんなこと言ったらあとで笑われてしまうじゃないかというような気がして仕方ないのですけど。

もともと私の親父は山梨県甲府市、しかも甲府商業出身なのですけど、それがどういう理由かは判らないのですが、戦前名古屋に来て、名古屋で知り合った女性、つまり母と結婚して、私が生まれたのが昭和15年、中村区大秋町というとこでなんですけど、母親は私が3歳の時、昭和18年に肺結核で亡くなっちゃったんですよ。

あの当時は「産めよ殖やせよ」という時代で、やたらと子供を作らなきゃならなかったみたいだそうですけど、まあ、そんなことで私の下に妹が2人を残し亡くなってしまったものですから、とても父親一人では子供3人育てられないから、ということで、山梨の知り合いの紹介で後妻をもらいましたが、3人の子供を育てられないとの事で、名古屋の近所の方に、一番末の妹を養子という事で出してしまったのです。

空襲が始まった時に、うちの親父は体が弱かったので軍隊に入ることはなかったのですが、私が6年生の時に生母と同じように肺結核で亡くなっちゃったんですよ。

やはり一番苦労したのは育ての母親ナミさんなのですけど、その母は90歳まで長生きしました。そんなことで、再婚後生まれた2人を入れると5人兄弟ということになるのですけども、母が亡くなって10年経ちますがその間に5人兄弟のうち妹2人は65歳という若さで亡くなってしまったのです。

そんな家庭の中で育ちまして、私共は親父が軍隊に行けないということで、名古屋も空襲で危ないだろうからということで早々に、百田家の本家のある山梨県の韮崎市から、また山奥の保坂村という田舎に疎開をしました。その中で私が一番記憶に残っているのが昭和 20 年の 3 月ですかね、東京大空襲の、東京都内が夜中に真っ赤に燃えてるところを、あの保坂村の山から、東京の空を見上げていました。大空襲で燃え上がったところを経験しており、戦争の恐ろしさというか、あの中でどれだけ東京の方が犠牲になったかというように思ったわけなのです。

親父がまともに生活できなくて、何で生計立てていたかは分からなかったのですけど、ただ甲府商業出たということだけで、経理の仕事ができたんでしょうね。ですから私も物心ついた時には、親父に負けない経理マンになろうと思う気持ちがそこにありました。

まあそのようなことで、生活は転々とし保坂小学校に入学しましたが、その1年後に戦争が終わったから保坂村を後にし、親父の実家の甲府市に出てまいりまして、そこの国母小学校に 2 年間おりましたが、田舎には仕事がなく、やはり名古屋に行かなきゃいけないということで、うちの親父は名古屋に名古屋にという気持ちが強かったのでしょうね。それで小学校の 4 年の時だったか、また今度は名古屋に戻り、一番末の妹を養子に出した家に間借りをして中村小学校に転校しました。その後中村区の中村公園のちょっと南へ行ったところなので

すけども、押木田町というところにアパートが5つくらいあり、そのひとつの木造の 2 階建てのアパートの一室に入ることができました。そして丸栄というデパートの経理の仕事についていました。

それで、そこまではよかったんですけども、その後父親が病院に入院し、そして 1 年半ぐらい闘病生活を送った後亡くなっちゃったということで、一番苦労したのが、後妻になったナミさんでしょうね。私もそういうことで、親父が亡くなってから、うちの母親は一生懸命内職をして、私もよく手伝わされたり、新聞配達などをして、家計を支えるようなつもりでいたわけです。そういう意味で、中村小学校から豊国中学校に入りまして、その当時のあれですね、今でもそんなに英語ができないというのは、中学校の先生がベッティさんというあだ名の先生で、何しゃべっているのか発音がわからなくて、いまだに私は英語が嫌いと言っていいほど苦手です。そのようなことで、学校の教える先生によってこんなに違うのかなあとつくづく感じたわけなのですけど、やはり自分の好き嫌いなんていうのも、学校教育の教師によるものもあるのかなというような感じを受けたわけなのです。

その中で、家庭が家庭ですから、すでに甲府からまた反対に名古屋へ出てくるときに、その下宿していたところで、私のすぐ下の妹を置いといてくれと言われて、それでまた養子でなく預けっぱなしにして甲府を出てきたものですから父が亡くなった時は、私と後妻子供2人を含めた4名の生活でした。そのような生活の中で、中学を卒業すると同時に、働きに出なきゃいけないということで、中学卒業後で、佐竹という鉄工所だったのですけど、あの当時自転車やオートバイの部品を造っている工場だったのですけども、そこへ就職して半年ぐらいで、たまたま私と生年月日が同じ友達に出会ったのです。近藤くんといったのですけど、その時彼と意見が合って、「おい、われわれいつまでもこんな工場で生活していていいのかね」「だったら夜間でもいいから高校まで行こうか」。そんな感じで、彼は鳴海に住んでたものですから、「僕は中村区ですよ」という話になって、「じゃあ学校は近いところがいいね」ということで、まあその時に初めてその、友達というのですかね、自分たちの進路を決めるのにやはり、友達は大切だという事を認識しましたね。

その後彼は向陽高校の夜間部、そして自分は、夜間専門の市立中央高校というのですけど、これがちょうど今の松坂屋の前にあって、昼は中学校、夜はわれわれのために開校していたような学校だったのです。

そこになんとか入学ができて、夜間高校に通いながら勉強するんだ」というような気持でしたが「この鉄工所でいいのかな」ということを考えた時に、名古屋タイムズ社というのが、学校のすぐ近くにありまして、そこで臨時工の話がありましたもので、「卒業するまでいいだろう」と思い、転職しました。新聞社ですから、活字を一つ一つ拾う作業をさせられたのですけど、最初は活字を並べる仕事で、少しずつ慣れてくると、「おい、この分の見出しについて何号活字で、ゴシックでこれは明朝体活字で、探してこい」というような仕事でタイムズ社で 4 年間頑張りました。

卒業する時に担任の先生より日商の2級が合格できたんだから「お前はやはり、簿記が好きだったら、会計事務所を紹介しようか」というような、先生の特別な取り計らいで、土屋経理事務所に入所することができました。私は 2 人の師匠に恵まれたというかその 1 人である土屋先生にめぐり会えることができました。

昭和 34 年 9 月伊勢湾台風で押木田町のアパート 5 棟の内の 2 つがぶっ倒れ、われわれの所は残ったのですけども、まあこれも老朽化して、いつ倒れるかわからないと言われた時に、うちの母親が、北区にある県営住宅に引っ越してくれたのですが、今度は昭和区にある土屋経理事務所に通うのに、通勤時間が 1 時間以上、あの時はバスしかなかったのですから、毎日遅刻していて、先生に叱られて、「お前、だったら住み込みにしろ」と勧められました。僕自身考えてみたら、その住み込み生活でよかったな、というふうに思っていたのです。生活の躾が悪く、世間の言葉遣いから生活態度から、いっさい何も知らない無知のやつが入所したものですから、先生から「お前、生活の態度をきちんと仕込むから、家に住み込め」ということになりました。

入所の 1 年目は、まずは仕事を覚えるのが先だ、

ということで大学には行かせないと言われました。しかし、先生は、「昼間は仕事に打ち込み、夜は勉強しろ」と言われ、YMCAに通い、苦手な英語の勉強をしました。

要するに、夜は遊ばしておきたくはなかったということで、YMCAで少しは勉強したんですかね。翌年の愛知大学受験には、英語が受験科目だったのですけど、何となくできたような気がして。あとは商業で簿記はもともと好きだったので、入試には通ったというような感じだったんですけど。

愛知大学の一番思い出に残るっているのは、学校に食堂みたいな売店があって、安く牛乳とかパンとか、確かウドンも食べられた。これは夜学校に通う者として、そういう面では助かりました。帰ってきてから住み込みですから、食事だけはちゃんと奥さんが用意はしてくれたのですけども、まあそれにしてもやっぱり 6 時ごろにお腹すくものですから、そういうような大学の食堂か売店か覚えはありませんが、何しろそこで毎晩牛乳とかパンを食べたのが、記憶に残っています。

それから 1 年、2 年は、教養課程で休むことができなかったのですが、3 年生になったら、結構先生によって休講ができたのですね。で、この時間を何するかと友達と相談した結果、麻雀をやろうじゃないかと決まり、近くに雀荘がありましてね。休講になると、すぐそっちに行ってたんですよ。これは正直言いまして、社会に出て役に立ちましたね。あの、沖縄に来ても麻雀の熱は非常に高かったのですけれども、東京で勤めた時もその仕事先で、麻雀の好きなお医者さんがおりまして、「おい、百さん、麻雀だ」と言われ、「はい、いいですねえ」とか何とか言って、駆けつけて麻雀をさせていただいて。ま、下手くそだったものですからいじめがいがあったのでしょう。そんなことで、やっと牌を並べて、点数を数えることぐらいまでしかできなかったのですけども、大学時代は、学生だからそんな大きなお金をかけることなく、麻雀で勉強させていただきました。

愛知大学の学生として一番記憶に残っているのが、一生懸命 1 年、2 年で単位を取って、3 年、4 年で楽に卒業できるかといった計算をしていましたが、その 3 年の時に受けた経済史の講師は玉城肇先生でした。この先生、ひょっとしたら沖縄の出身なのかと思っています。沖縄の姓に、玉の城と書いて「玉城」がありますから。その先生の経済史を、3 年の時に受けたら不合格でした。4 年の時も不合格で、「さあ追試だ」「ええっ、何で追試？」。

一生懸命 2 年間かけて勉強したはずなのだけども追試って、先生の主旨と自分の考え方が違っていたのかもしれない、と思いましたが、合格点がもらえなくて。それでも最後の卒業間際で初めてこの経済史の合格をいただき、卒業することができました。これが一番記憶に残っております。

大学行ってる時も自分はもう会計事務所に入っていたのですが、土屋先生は国税OBではなく、あの当時「岡本自転車」という自転車屋さんがあったと思うですけど、そこの経理をしながら税理士試験に受かって、税理士事務所を開業したと聞いておりましたから、自分も一生懸命勉強やってたものだから、みんなに勉強しろと云々。そうすると、どうしてもその中で、自分は日商の簿記 2 級を受かってたものですから、1 級受けなきゃならないという事で、大学の 2 年の時ですかね、何が何でもと思って、それを受験したら、合格したので、「ああ、1 級受かると、税理士の受験資格ができるんだ」と知り、3 年には税理士試験を、簿記と財務諸表を受験したら、見事に落っこっちゃった。「えっ！？何で？日商の1級を取っても、税理士試験は通らないのかね？」というような思いをしました。大学 4 年の時、もう一度受けたら、今度は財務諸表は合格し、簿記は落っこちてしまった。その時の簿記の試験委員が宮坂保清と沼田嘉穂先生であり、この両名の先生の名前だけは忘れることはできません。

まあこういうようなことで、自分の人生の中で「ええっ、こんなことあるのかね」っていうふうな思いは、非常に強かったのですけども、まあ、先ほどの展示会場で、われわれの入学時には、本間喜一学長でしたが、卒業証書には脇坂雄治学長の名前が記されたのが残っているのですけども。ま、そんなことで、土屋先生の所で下宿をし、厳しい躾を受け、食事とかの生活面では、ちゃんと面倒見てもらえたということで、本当に心から感謝しています。残念ながら、2 年ほど前に 90 歳で他界され、1 年後に奥様も亡くなられてしまいました。まあそんな記憶の中で、葬儀に参列させていただき、お別れの挨拶

を述べさせていただきました。自分の人生の中で一番先生には本当に感謝していました。

大学を卒業した年は昭和 40 年ですが、前年の 39 年の時に、新幹線に乗って東京オリンピックに行った覚えがあります。で、その東京オリンピックを見に行った時に、やはり「わあ、東京は都会なんだ。名古屋とはえらい違いなんだ。こんな所で勉強したい」というような気持ちになっちゃって、帰ってきたら「先生、卒業したら東京に行きたい」と言ったら、「何を！」て叱られたのですけども、最後には「お前の意志は固いようだから、せっかくお前ここまで、おれが面倒を見てきたんだから」と言って励ましてくれ、「まあ、そういう気持ちだったら東京に行って勉強してこいよ」というようなお話をいただきまして、東京に行くことができたんですけども。その当時、貯金と自分の生活費を、お袋は「もうお前の自由にしていい」というものですから、私は自分の事ばかり考えて、東京に行きました。そしてまずは 8 月の試験、例年 20 日前後の一番暑い盛りでしたけども、その時に、「簿記論を 3 年受けて合格できなかったら、もう税理士試験はやめた」なんていうような気持ちでおりまして、そしてその上京した 8 月までよく国会図書館に行って、涼しい所で勉強させていただいたおかげでその年に簿記論に合格しました。

まあその中でも、友達が 2 人ほどできまして、3 人とも試験には最後に受かったのですけども、受かってから公認会計士の受験勉強するのだということで、某先生ですけども、後日、日本税理士会連合会に行きましたらその先生にお会いいたしまして、「おお久しぶりだなあ。何年ぶりだ」なんてことで、片や公認会計士で監査役をやっていると言われちょっぴりヤキモチを焼きました。

東京での私の生活についてですが、まずは会計事務所なら当然あるだろうということで、ある会計事務所を訪ねて、まだその当時は土日休みがなく、日曜日しか休みがなかったのですから、「先生、たいへん給料安くて結構ですので、土曜日 1 日勉強する時間をいただけませんか。そういう条件でしたら、働かせていただきます」ということで、自分勝手な条件を言ったのですが、そしたら「おっ、君だけだな。そういう条件つけたのは」と言いながら、「まあ、やってくれ。特別だよ。お前に…」ということで、土日だけはやはり国会図書館へ行って法人税の勉強をさせていただいておりました。

昭和 40 年に愛知大学を卒業して東京へ行き、そしてそこで勉強をさせていただき、昭和 42 年に税理士の試験を合格させていただくことができたのです。そうしたら今度は母親が電話で「お前税理士の試験受かったんだから、今度はお嫁さんをもらえ」と言って母親として心配してくれたのでしょうね。すぐ自分のお嫁さんの話を持ってきて、「ほら写真だ」「まだ早い」と言ったけど、お嫁さんがいたほうが落ち着くというような事になり結婚に至りました。「結婚すると今の会計事務所だけで生活するのは大変だなあ」という時に、雑誌で宮坂保清事務所が職員を募集してる広告を見つけたものですから、一度、公認会計士事務所で「公認会計士はどんな仕事をするんだろうな」というようなことに、非常に興味を持ちまして、宮坂先生の門を叩いたのです。

この時の話をもう少しさせていただきますと、面接に出かけたのが朝 9 時に出かけたのです。そして、その宮坂先生は当時、ものすごく忙しい先生でした。公認会計士の副会長をやってる関係で、NHKの、今はないのですけど第 2 チャンネル（教育）の夜7時半から8時まで簿記講座を持っていたのです。そしてあとは明治大学の講師をしながら各地で講演をしていましたので、忙しい先生が面接を、だいたい 10 分か 15 分で終わりだそうですけども、私の後に 2、3 人いらっしゃったのですけども、私と話をして忘れてしまったのか、最初から先生、「おい、入所試験を受けるか」という話を聞いて、「ええ、そりゃ先生、勘弁して下さい」と、「私は先生のためにじゃなくて、先生の試験を受けるのに、3 年間苦労したんですよ。80 点以上の合格点は十分あったと思ったのですけど」と言ったら、「へえー」と笑って、「君、専門家なのに、何が『試験で 80 点取ったら』で社会に出て通用すると思ったら大間違いだ。100 点満点であってこそ、初めてプロといわれるのに、何が『80 点だ』って叱られました。

私は「ああ駄目だなあ。もう断られちゃったなあ」と、半分開き直っちゃったのですけど、そうしたら、先生からいろんな質問がありまして、「税理士になるには資格を取ったのだけれども、商法とか民法

が分かるか」というような話になりまして、「えっ、そりゃある程度は」「じゃあお前どう考えているのだ」とか、商法の問題で、「会社を創るのに何人の人員が必要か」とか、面接でもういい加減に萎えちゃったものですから、私自身開き直り、ああだこうだってやってるうちに、3 時間経って 12 時になり、昼の休憩時間、「あっ、12 時か。これでもういいか。君、明日から来るか」って言われました。「ええっ、待ってください。私はまだ勤めに行ってる者ですから」「じゃ、いつから来れるか」ってことで、「月が改まったらでいいですか」と言ったところ、「俺に何にも遠慮なく物をぶつけて質問するやついるか」って言われたのですけれども、まあ、自分はもうどっちみち、この試験には不合格だと思ったものですから、反対に先生に質問しちゃったものだったりして、反対に叱られちゃったのですけれども。そんなことで、先生との出会いがまずそこで生まれて、そして「3 時間の面接なんて、あとにも先にもない」と後から秘書の方から聞きました。次の人といったら、「もう今日はしません。帰って下さい」って言われて、何か失礼しちゃったなと思ったのですけれども。

まあそんなことで宮坂先生とご縁があって、いろんなことでの勉強をさせられたのです。そして一番勉強させられたのは、お酒なのです。夜、本間先生というすばらしい先輩で、その彼の仕事ぶり、人間性がすごかったのですけども、仕事の打ち合わせをする時に、必ず私が同行させられ、「今日は上野のあそこの焼き鳥屋さんで、10 時から打ち合わせをしよう」と、「ええっ、10 時からですか」「いやあ、宮坂先生は忙しいのだから」と言って小料理屋のカウンターに先生を挟んで左右に座り、宮坂先生は御猪口を持ったまま下に置かないのです。そのままグッと飲むと、またすぐこっちへ。本間先生は自分が大変なものだから、私と付き合えと言って 2 人でお酌をしました。そんなうちに、「君たち、俺にばかり注いでるけど、酒飲まないのか。酒飲めないやつは、仕事できないやつだ」とおっしゃられた。「どうしてですか」「よく考えろよ、今度の決算報告でどこどこの会社に行くだろ。その時に会社の社長とか専務は『本当にうちの経理はこれでよかったのですか』と念を押される。社長とか役員とかは帳簿を見ない。みんなすべて、経理部長なり経理課長に任せてる。それを監査したりチェックするというのは、あんたたちだ。で、酒飲んだ時に、『いやあ、仕事はどうも、今回の決算はご苦労様だったねえ』って、お酒を飲まされた時に、飲みすぎて、ある事ない事ベラベラベラベラしゃべられたら困る。酒を飲んでも飲まれるな。そしてきちんと酒飲んでも、自分のきちんとしたこういう答えができるようなことを訓練しなければダメだ」。自分の生活態度は、名古屋で土屋先生に、大学では麻雀を教わって、今度は東京に行った時には、酒の注ぎ方から酒の飲み方まで、宮坂先生に教えてもらって。そんなことで、おかげでお酒も麻雀も強くなって、やらなかったのは、パチンコだけはやらなかったですね。まあ、これはいくら金があっても足りないってことはわかりきったものですからやらなかったのですけれども。

そんなことで、なぜ愛知大学だったのか、歴史と伝統ある愛知大学でのそういう良さはあったのでしょうけれど、そこにたまたま大学があったから入らせていただいた。そして車道の二部に、そこの学校に通わせていただいた土屋先生のところからも、税理士が数人輩出しております。一緒に勉強した連中が 2、3 年してから、資格を取ったという話を聞いております。

まあ、宮坂先生との出会いで、今度はいろいろな自分のものの考え方というのですかね、いつも飲むと 12 時になって、仕方ないからといっていつも本間先生が志木に住んでいたので、自分が帰るのが大変だから近くに引っ越して来いって、埼玉県の富士見町鶴間の中古の建売住宅を紹介してくれましたが、「いや金がないです」「金は銀行から借りてあげるから」「ええっそうなんですか」ってことで、中古の建売、あの時に 300 万ぐらいで買えたのですかね、そのうち 100 万はどうしても金ないから、自分の家内のほうに頭を下げて借りて、200 万銀行から借りた。今度は反対に、沖縄に出てくる時にその建売の、中古住宅だったのですけども、そこを売ったときが、1000 万円以上で売却できたのです。あれが本当にバブルだったのですね。おかげでその 1000 万円を頭金にし、那覇の住宅を買えることになりました。

で、どうして私は宮坂先生の所から沖縄へ移ったのかという話なのですけども、まあ非常にこれも

宮坂先生がちょうど公認会計士協会の役員をしていて沖縄と縁があったのです。沖縄が復帰される前に、沖縄の方はよくご存知だと思うのですけども、昭和 36、37 年に、キャラウエイ高等弁務官がいらっしゃった。その高等弁務官が、銀行があまりにも体たらくな経営をしているということで、すべての金融機関のトップをあっさりと切り捨てたのです。それを「キャラウエイ旋風」って言ってましたが、そして今後銀行は公認会計士の監査を受けなきゃならないということで、沖縄の琉球政府時代は、外国公認会計としての試験があり、公認会計士の試験に宮坂先生が受験して合格して昭和 36 年か 37 年ごろ、先生自身が沖縄に来ました。そしてもう一人が、鹿児島からの長田義丸先生なのですけども、うちの宮坂保清との 2 人が、外国公認会計士という資格を持って、各銀行の沖銀系列と、琉銀系列かはわかりませんけども、そういうような格好で、先生たちが監査をさせていただいた。

本土復帰した年が、昭和 47 年。これでいったん銀行の監査はなくなったのです。今は商法監査で銀行は監査しなきゃならないのですけれども、宮坂先生は、自分が引き受けた沖縄という所に非常に思い出があったのでしょうね。「うん今度は、税理士が行くべきだ。監査は必要ない。税理士の資格があるやつが行って、沖縄で税のほうの顧問先を拾ってこい」と、まあそんなことを言われましてね。

初代の人が、若狭っていう人で、非常に苦労した。今でこそこれだけの、どこに行っても同じような食事なのですけども、あの当時、昭和 50 年ごろに私が来た時は、どこに行ったって日本食なんて食べられなかった。一軒だけあったのが、国場組というデカい建設会社のビルの中の 10 階に「日本閣」というお店があり、そこに行くと日本食が食べられました。ただ毎日行けるところではなかったので、どうしても沖縄の味に慣れないことには生活できなかったのです。

そういうことで、初代から来て 2 年半務めたから交代ということになりなりました。ちょうど海洋博の年(昭和 50 年)だったのです。海洋博の年だということは、宮坂先生が海洋博の委員だったのです。実行委員のほうですかね。そのために自分がやってた海洋博、そして沖縄のあの当時の、松岡政保さん、沖縄電力の社長をやった人とか、その国場組の社長の国場幸太郎さんなんていうような、偉い方々がずっと役員をされていた。そしてそういう間柄だから「仕事があるんだ。それで今度はお前が行って、東京からのお客を沖縄に連れていくから、お前が水先案内人になってくれればいい」という話だったものですから、「そうですか。1年でいいんですか」「うん、1年でいいよ」と言われたのですが、1年が経ち、「もう少し我慢してくれないか」と言われ、「どうしてですか」ときいたら前に戻った若狭氏が、沖縄の生活について、有ること無いことをぼろぼろに言うものだから、とうとう私と交代してくれる人が誰も手をあげてくれなかったんです。

それで自分は自分で、単身生活を 1 年だけでもと思い、沖縄に赴任しました。あの頃の沖縄での沖縄電力はその下に配電会社が 5 社あり、この配電会社をどう電力会社に、どういう格好で合併できるかという大きな仕事が、自分の当時昭和 50 年の以前より問題にされており、「じゃあ、宮坂先生が俺は沖縄の代表だ」と言って、沖縄の総合事務局とやり合いになった。ならその為に資料を出せと。それで一番問題になったのが、配電会社の役員の対応であって、いくら退職金ができるかという、その査定評価。配電会社の帳簿がありましたので、そういうようなことでの、合併後はどうするのか。そのうちに合併が昭和 51 年の4月1日にできあがりました。その 2 か月前に、中央配電という配電会社の社長が、私が一番思い出深い方なのですけども、自分の中央配電から沖縄電力の次期社長かと思われていた方が、急に心筋梗塞か何かで倒れてしまって、私の第一番の仕事が、その人の相続税から始まりました。おかげでその後の相続の仕事を電力の某氏とか、元国会議員の某氏といった方々の相続税の仕事をさせていただいているのが、私の沖縄での一番の仕事として、強く残っております。

そんなことで、次に沖縄についてということで、「沖縄の特徴は何かなあ」ってことで、沖縄の人じゃなくて、沖縄に来られた方たちが書いた本なども一生懸命読ませていただいて、勉強させていただいたのですけども、若干沖縄に住んでらっしゃる方と関連が違うかもわかりませんけど、やはり一番沖

縄に私がもう取りついてしまったぐらいですから、そういうことで1年、2年は単身で来たんです。それから、もう沖縄で生活してもいいと決心したのは、沖縄の有名な方々の人の温かさとか、気候風土とか、あるいは環境に魅入られてしまいまして、これが「沖縄病」だといわれていますけども、そういうような沖縄病に取りつかれてしまい、「沖縄に永住しよう」と決めさせていただいたわけなのですけども、ではどういうものが沖縄の特徴か、というようなことも、重々おわかりかと思いますけども、そんなことを2、3お話しさせていただければと思っております。

私が沖縄に来まして、一番好きな歌は「芭蕉布」。これに取りつかれましてね、「海の青さに空の青」という歌詞の中で、やはり沖縄の自然の魅力というのは、なんて大変すばらしいんだなあという、ということと、私あの、世界遺産に登録されたグスク(城)、お城がというのですけど、本当に14世紀から15世紀にかけて、沖縄での戦国時代があって、そして3つの「三山」ってことで、尚巴志が中山王ということで、沖縄を統一し、そしてバラバラになっていた王族、そして一族を自分の首里のすぐ下にみんな集めちゃった。そして集めたのと同時に、今度は同じようにお酒も、そこでしか作っちゃいけないということで、酒屋さんまでそこに集めてしまったという歴史が残っております。そういうことで、首里の人と那覇の人とは違い、首里の人は位が高く、自分たちのプライドが今でもまだ残っていらっしゃるじゃないですかな。首里の人たちは言葉も違う。首里の丁寧語と、那覇の人が使う方言は違うんですっていわれるぐらい、首里にはそれだけの人たちが住んでいた。ま、そういうようなものがあるのですけども、一般的には、人と沖縄の家族と付き合うと、本当に何か、心温まるような、いろいろと心が癒されるような、気候風土もあるのだけれど、お付き合いの気持ち、まあつくづく感じられたのです。

でも中には、実際にはそういうような、あまりもの夏の暑さと、カルチャーショックで「理想と現実とは違うんだ」なんていうことで、沖縄にせっかく来たのに、また去ってしまう方も大勢いらっしゃるというような話も聞いております。けれども、そういう一つの沖縄の面が良いために、今でも正直言って良いマンション、たとえばどんな方が買うのかというと、みんな沖縄で商社か何かの会社の方で、支社長など来られた方たちが「いやあ、沖縄いいなあ。年中ゴルフもできるから、又、一年中また酒も飲めるし、酒だって7時8時の朝方まで飲める」「俺一度もないんだけども、そういう店でゆっくりと飲みたい」と。まあ、そういう方は体を壊しちゃうんですけど、みんな自分たちの老後の生活ができるんだなんていうようなことで、マンションが本当に飛ぶように売れているというのが現実です。そのために沖縄では、ダイワハウスなどはすごいですよ。すごい勢いでみんな、沖縄に次々と来ております。

そういうような、一つのやはり、沖縄の魅力がそういう気候風土の中に、持ちつがれております。それとやはり沖縄は、14 世紀からいろんな国との交易をしていたということで、14 世紀には琉球の王に中国から冊封使という使者が来て、「何々に任命する」という形で交易しておりました。それで、沖縄からどんなものが持ち出されたのかというと、これが当時中国では一番必要だという硫黄、火薬の原料になる硫黄が一番必要だった。それを沖縄から持ち出すために、向こうから喜んで、その代償としていろんな物を出してくれたんです。これで沖縄の人々の生活が潤っていましたが、残念ながら、17世紀に薩摩に侵攻されて、薩摩の従属になってしまったんです。このような歴史がありましたが、沖縄では文化も芸能も違う琉球料理とか郷土料理とかありますけども、こういった琉球料理というのは、14世紀の首里の貴族が食べるためのものだったのです。だから豚でも普通は皮とか足は出しませんよ。中身を、三枚肉というんですけども、豚肉のいい所を選ぶんです。そして処理は、豚の皮を出して、あるいはミミガーを出したり、足を出したりして、そういうのをおでんに使うようなものが郷土料理だというように名前が定義づけられておりますけども、まあ、食文化においてすら、そういうようなことだけども、どこに行っても同じように、何でも琉球料理だとか、郷土料理だかわからないような、ゴチャゴチャになっておりまして、居酒屋行きますと、何でもありますよということで出しておりますけども、そういう一つの「ごちゃ混ぜの社会」、これを「チャンプル文化」と呼んでいるようですけども、そういう沖縄の「チャンプル文化」にも魅力があります。

それから、あまりにもテーゲー、言葉がテーゲーな文化が流行っていたんですけども、今はないですね。沖縄の現在の言葉でいう、何かテーゲーというといい加減な事を言うんだけれども、本来はそういう意味のテーゲーではなくて、本当に相手を思いやっているからこそ、「もうそのへんでいいよ」という意味なんです。上が自分の仕事を言いつけても、あまりにも時間がかかってうまくいかない。汗水たらして一生懸命仕事をやっている、それを見て「もういい。テーゲーにしてけ。もうそのへんでやめていきなさい」というのが、何か知らないけど仕事になってしまって、テーゲーという言葉をお使いになってしまったのだけども、まあこういう沖縄の特徴を1つを挙げましたが、他にも 2 つあって、「沖縄タイム」、それから「イチャリバチョウデー」。「イチャリバチョウデー」と言えば、「人と出会えば、みな兄弟ですよ」という。この文化が一番、沖縄で心が癒される文化であります。

このような、3 つの大きな特徴があると思うのですけども、もう一つ私はぜひ、これはある人から聞いた話なのですけども、沖縄の人はこんな人なんだということを、ご紹介をさせていただきたいと思います。あの、これはもうおじいちゃんの代といいますか、親父から自分が引き継いだのでしょうね、その彼の青年が、やはり中国、これは（東亜同文書院があった）上海かどうかはわかりませんですけども、ただ地方はわからないですけども、中国に働きに出かけていた。その時に、中国の娘さんに惚れてしまったんでしょうかね、「ぜひ自分のお嫁にしたいんだ」と言った時に、そのあまりにも日本へ、自分の沖縄でもまだ復帰することによって日本人だと思われがちですけれども、ま、そういうようなことで、さあ、その彼女の両親が許可していただけるかどうかという時に、非常にその青年は迷った。だけども、自分のおばあさんに聞いた話で、「うちのおじいも中国に行ってたんだけども、70 年前日本軍がどんどん中国を侵略した時に、一人の青年がその部落に飛んできて、『ここにこれから日本人が来る。すぐ逃げなさい』って、もうそのアドバイスで、本当かどうかはわからないけども、その人の言葉を信じて、その通りにサアーっと山のほうへ逃げてしまった。あとから日本軍が来て、その部落はみんな焼かれてしまったが命は助かった」。まあそういう話で、「すぐ逃げなさい」と言ったその人は沖縄の人だった。そしてその娘さんの両親の、おばあちゃんは「私たちが今日あるのは、その人に命を救われたからです」と。沖縄の人というのは、決して人を殺したり、無益なことをしないと思います。そういう気持ちで、まずはもう自分達が納得して、「もう人を殺すのは嫌だから、もう逃げて下さい！逃げて下さい！」と、そういうことを叫んだというおじいちゃんがいたのですが、そのおじいちゃんは沖縄の墓に眠っているそうです。

だけどもその、自分の孫にあたる者がやはり、娘さんの両親に行った時に、「いや、実は私は、沖縄の方たちに命を救われたんですよ。あなたがうちの娘でよければ、国籍に関係なく貰っていただきたい」という承諾を得たのです。その話を聞いた時に、やはり戦前からの沖縄の人たちというのは、こんなに心の優しい人たちがいたんだなあと。戦争の真っ盛りにも、中国の人たちを助けた。で、これが今、自分たちの孫になった時に、やはりそういうような、お返しができたという結果が出てきた。こんな話を聞きました時に、その青年は「うちのおじいのやったことは、そんな話は聞いたんだけども、まさかそんなことをやっているはずはない。だけど『戦争に行ったんだけども、私は一人も中国人を殺さなかったよ。むしろ中国の方を救ってあげたんだ』という、おじいの話をおばあから聞いた。そのおばあがまた、自分が行った時にそういう話をしてくれたがために、娘さんをお嫁にできたんですよ」というようなことで、現在もまだ、中国で働いているようですけども、何かそのようなことで結婚できたというようなことで、沖縄へ墓参りができたのですよなんていうような話を、私も人づてに聞いた時に、沖縄の人というのはやはり、心優しい、本当に心温まるような人だなあと思いました。

そういうような沖縄へ、私が来てまあ 40 年近くになりますが、復帰して 2 年した後で沖縄に来て、沖縄でこうしていた時に、やはりこういうような、自分の仕事を通して「愛知大学だ」という、そして我々が今誇りをもっているのが、愛知大学を出た人たちが同窓会をやります。今日もちゃんと税理士が4人、顔をそろえている。弁護士も1人おります。まあそ

んなことで、愛知大学を卒業したということに対しまして、本当にまあ、感謝すると同時に、沖縄の人たちに何か役立つことができればというようなことで、私は一生懸命、社会奉仕、ライオンズクラブですけども、我々は奉仕をするんだという気持ちで、取り組んでおります。これも一つの、ボランティアかはわかりませんけども、そしてこの沖縄にいて、ライオンズクラブでも、私は今の税理士会の会長になる前には、それまで 337-D 地区のガバナー、エリアは熊本・鹿児島・沖縄 3 県の、管理職ですけども、責任者になり、1 年間はそういうような事で、熊本に行ったり鹿児島に行ったり、自分のライオンズクラブとしての責任を果たしてまいりました。今度は九州全体の複合地区のガバナー協議会議長までさせられてしまったのですけども、まあそういうことで、九州の隅から隅までとはいきませんけども、だいたい九州地区での責任を果たしてきたんだなあということと同時に、やはり与えられた使命というか、指名されたことはやらなきゃならないし、また与えられてる機会を、大変ありがたく感謝しなきゃいけないなあと思ったのです。

最初は今日のお話も、こんな拙い話でいいのかなあという、藤田先生から「おまえでいいよ」と言われて、「はあ、そうですか」ということで、まあ、最初は電話でお断りしてたのですけども、ライオンズ精神では「指名されたら、絶対に自分の役付は断るな」ということを、我々の大先輩からみんな教えられました。そういうことで、自分が与えられた職務については、一生懸命やり、またこれからもこの歳ですから、あと沖縄に何ができるかわかりませんが、一生懸命やって生活していきながら、かつ愛知大学に、1 人でも 2 人でも沖縄から入学して、愛大精神を生かしていただければ、心強く大変うれしい思いでございます。ちょうど 2 時になりました。こんなところで、拙い話だったんですけども、少しでもお役に立てればと思いまして、この講演を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

藤田　どうも百田先生、ありがとうございました。これを機会に、何かご質問がありましたら、ぜひ。

会場からのご質問をいただきました。

百田　半分自分の生きざまというか、生活環境が変化したものですから、一生懸命やればできるんだという感想ですが。ただ失敗したこと、心残りが一つあるのです。女房が早く亡くなっちゃったのですが、ちょうど 7 回忌を先に終わらせていただいたのですけども、子供の教育というのは、やはり両親がやらなきゃならない。私は自分のことだけで一生懸命で、子供の教育は、母親に任せればいいって、母親には母親の優しさがあるからなと、ほとんど子供に対して、ああしろこうしろということは強くして、教育をしなかったために、自分の好き放題なことをやって。子供にとって、どちらが幸せかはわかりませんけど、まあ苦労はお父さんだけでいいよというぐらいで、あんまり子供は勉強しない、と。そうなってしまいましたのですけども、非常に心寂しい思いでございます。それだけです。どうもありがとうございました。

百田　あの、もう一つつけ加えさせていただきますと、現在、沖縄税理士会は 360 名で、その中の 3 分の 1 が琉球大学の卒業生なのです。そして、私が愛大なのですけども、友利先生も愛大だというのです。で、私の次は友利先生が、私が会長の時に、「次はあなただよ」ということで、ぜひ副会長になっていただきたく、すでにバトンタッチをしました。

来る 6 月の総会をもちまして、私の次期会長は、友利博明先生ということで決まっております。愛大出身の友利先生の次は、琉球大学の卒業生が会長になるはずですけど、とにかく、私の後継者は、友利先生ということで、もうすべて決まっておるということをつけ加えさせて頂きます。友利先生、また愛大の方も、何卒よろしくお願いいたします。

藤田　どうもありがとうございました。